

# 小説『内灘夫人』の現代史

奥田 尚

はじめに

『内灘夫人』は五木寛之の小説である。五木寛之はその作品『変奏曲』に、次のような「あとがき」を付して公刊した。この「あとがき」は、『内灘夫人』を理解するためにも、重要なポイントが含まれているので、やや長いがすべてを引用しておきたい。

この物語を書く前に、私は『内灘夫人』と、『デラシネの旗』という二つの長編を書いている。『変奏曲』は、いわばその二つの作品のヴァリエーションと言ってもいいだろう。或いは陽面に対する陰面の関係ともいえる。『変奏曲』という題名にも、その意味がふくまれており、私はそれらの三つの物語を重ね合わせて、ようやくひとつの世界を立体的に透視することができたのではないかと感じている。

私がこれ以上この主題で小説を書くことは、もうないだろうと思う。その意味でこれは私にとってひとつの葬送曲でもあり、別れの歌なのかもしれない。これを書き続けていたのは、テルアビブ空港の事件やS女史の出国事件などのはるかに前で、マンントンの音楽祭も、しごく平和なおもむきであったが、その背後にはやはりただならぬ地鳴りが遠くかすかにひびいていたようだ。

(一九七三年 京都にて)

『内灘夫人』は、一九六八年八月三〇日から翌年五月一〇日まで『東京新聞』など三紙に連載された。単行本としては六九年一〇月に新潮社から発行され、七二年三月に同社から文庫版が発行されており、九〇年三月に三刷で改版されている。主要人物は後にも述べるが、『内灘闘争』に関係し今は夫婦になっている男女と、六九年ころの「大学闘争」の渦中にいる若い男女である。

『デラシネの旗』は、一九六八年九月『別冊文芸春秋』一〇五号に発表され、六九年九月に単行本、七一年一〇月に「改訂版」が文芸春秋社から発行された。一九五二年の「血のメーデー」に参加した三人の男女、そのうちの一人が六八年のフランスの「学生革命」に活躍してお

り、彼を追って男女がパリを舞台としてさまざまな経験をする物語である。

『変奏曲』は、一九七一年三月から七二年四月まで『太陽』に連載され、七三年六月に新潮社から単行本が、七五年一〇月に同社から文庫版が発行されている。主要登場人物は、当時から一七年前の左翼革命運動に一緒に参加し、やがて別れた男女である。二人が偶然にパリで出会ったことにはじまり、南仏マンントンの音楽祭を主要舞台とする。

この三作品は、それぞれに過去に左翼運動に関係した男女が織りなす物語という点で共通することは、五木のいう通りである。それぞれに異なる形で、現在の現実と関係を切り結んで行くのであり、三作品の登場人物の現実への関係性も興味深いものがあるが、ここではそれを問題にしない。

「私がこれ以上この主題で小説を書くことは、もうないだろうと思う」と五木がいつているのは、主要登場人物の過去が左翼運動に関係した共通性を持つということに関してである。五木の諸作品の主要登場人物にみられる共通性は、現在の現実と切り結んで行こうとするさまざまな姿勢の積極性にある。登場人物が左翼に関係して

いようといまいと、現実と切り結ぶ姿勢の積極性は、五木の主要作品の変わらない特色である。五木は一貫して、「現実の社会」に「生きる」人間の物語を、描こうとする作家なのである。

「現実」をそのまま投影することは、「文学的」ではないとする評価があつて、五木の作品は通常は「中間小説」という範疇に分類される。「純文学」の研究者にとっては、こうした分類で自己の研究の領域ではないと宣言することで充分なのであろう。しかし、こうした分類をされること自体、五木の作品は現代の社会を直接に投影していることが、広く承認されているということの意味する。このように「中間小説」という分類のされ方そのものからしても、五木の諸作品が十分に「現代史」の一断面を代表する資料たりうるということが証明されているといつてもよい。

### 一 本稿の方法と課題

時代の背景とともに文学作品を分析し研究することは、従来の文学研究でも盛んに行なわれてきた方法である。しかしながら、従来の方法は、時代の中に文学作品を位

置づけることに力点があった。このために、時代の背景は所与のものとして、あるいは前提としてしか問題にされてこなかった。文学作品の研究にあつては、そうした方法が必然でもあるが、こうした方法による場合、はたしてどの程度に「時代の背景」が所与のものであるかという点に、根本的な疑念が残る。

さらに、無機的に「時代の背景」を羅列することは、たとえば歴史学の成果を借りれば容易であるが、文学作品といったいわば精神面にかかわる「時代の背景」といっただけものは、現在までの歴史学研究の水準では、ほとんど問題にされていない。時代の背景とともに文学作品を論じることは、正しくは「その時代の人々の心」とともに文学作品を論じることではなければならない。

「その時代の人々の心」とともに文学作品を分析する場合には、「人々の心」は所与のものであり、「人々の心」は作品に自からを刻印すると同時に、作品は「人々の心」に対しても自からを刻印しているという、「人々の心」と作品との相互関係に留意することが必要である。そうでなければ、文学は「時代」の従者にすぎないという、悪しき歴史至上主義におちいることになる。

とはいえ、実際には上述のような方法の実現は、きわ

めて困難であることも事実である。そのような方法による作品の分析は将来の課題として、それに近づくためにここでは『内灘夫人』の主人公の沢木霧子と彼女をめぐる人物たちの「心」を抽出し、それを当時の「人々の心」に位置づける試みをしてみたい。なお、以下では一九XX年の場合は、一九を省略してXX年とすることにしたい。

## 二 沢木霧子と森田克巳と「全共闘」の時代

冒頭は、後に霧子に関係してくる森田克巳が、「都内に設置された米軍野戦病院撤去運動」の署名と街頭カンパを集めているシーンである。「羽田事件や原子力空母阻止闘争以来、彼らにとって街頭カンパは単なる資金獲得の手段ではなくなっている。それをきっかけに、学生と通行人の間に思いがけぬ議論や話し合いが生まれることもあったからだ」とある。

「米軍野戦病院撤去運動」は、後述する米軍の原子力空母が佐世保を出港し、政府が今後原子力空母の寄港を承認すると発表した翌日、六八年一月二四日、東京都が米軍王子キャンプにベトナム戦争での傷病兵用の病院

が開設されると発表したこと、一挙に表面化した。三月一日には開院されたが、二一日には都議会が廃止を要請するなど、反対運動が行なわれた。ベトナムの戦場と東京が直結され、日本は戦争の当事国になったと感じられたのである。

「羽田事件」は、六七年一〇月八日佐藤栄作首相の東南アジア・オセアニア歴訪に反対する学生が、羽田空港へ向かう途中で機動隊と衝突し、死者一人を出した事件である。佐藤の東南アジア歴訪は、この直前の九月二〇日から三〇日にかけても行なわれた。さらに佐藤は、九月七日にも台湾を訪問していた。

これら一連の東南アジアに対する訪問は、日本が東南アジア市場の獲得を目指す動きであり、また八月八日に結成された東南アジア諸国連合への日本の影響力の確保をねらい、さらにはベトナム戦争への積極的な貢献を目的とするものとみられていた。

佐藤は、この年の一月一二日米国へ出発するが、それに反対して第二次羽田闘争が行なわれた。この訪米は、日本のベトナム戦争への関与、また東南アジアへの日本の影響力をめぐって、米国との調整を目指したものとみられた。一月一五日ワシントンで、沖縄返還の時期は

明示せず、小笠原は一年以内の返還という内容の日米共同声明が発表された。これは米国との調整が成功したと、とりわけ米軍占領下にあった小笠原が返還されることは、日本の軍事力が米軍を代替しうるまでに成長したと米国が認めたことを意味すると思われた。

一月二二日の帰国後の記者会見で佐藤は、国民の防衛努力が必要と発言したこと、翌六八年一月三日米国大統領ジョンソンの特使がドル防衛のために日本の東南アジア援助の大幅増額を要請したことなどは、こうした予想を裏付けた。

また、佐藤のこの訪米の「手土産」といわれたのが、一月二日の政府の米国に対する原子力空母の日本への寄港承認通告である。寄港の承認は、ベトナム戦争に参加した空母が作戦行動の一環として日本に寄港することを確認するものであり、直接にベトナムの戦場海域を日本にまで広げることが認め、日本のベトナム戦争への貢献のひとつであった。

翌六八年一月四日には、米国がベトナム海域の原子力空母エンタープライズの佐世保寄港を発表し、実際に一九日に入港し二三日に出港した。これに反対する闘争が「原子力空母阻止闘争」であり、一五日には東京から佐

世保に向かおうとした学生二〇〇名のうち、一三一一名を東京で逮捕したことや、博多駅頭での過剰警備、佐世保での警棒の過剰使用など、高圧的な警察の対応が目立つた。

学生運動では、六八年一月二九日に東大医学部に「登録医」制度反対運動がはじまり、同年四月一五日国税庁が日大の二〇億円の使途不明金を発表し、その追究運動がはじまった。これらはやがて、東大闘争や日大闘争など全共闘運動へつながっていく。ここでは日大全共闘が結成されたのが五月二七日、東大安田講堂を医学部学生が封鎖したのが六月一五日であったことだけとどめておこう。

このような日本の学生運動の高揚のきざしは、世界的にも六五年二月七日に開始された米軍のベトナム北爆などへの反対運動とともにあらわれ、六八年五月にはフランスでは「五月革命」とよばれるような頂点にさしかかっていた。学生運動ではないが、中国では六六年五月以降は「文化大革命」が進展していた。世界的にも学生たち若者による、既成価値を徹底して否定する「激動の時代」であった。

### 三 霧子と良平と「内灘」の時代

霧子の夫の沢木良平は、広告会社の社長で、黒塗りの運転手付きのベンツに乗っている。東京の郊外に「白くそびえている自分の家」を持ち、夫婦と家政婦の三人で暮らしている。良平は「これがおれの家だ」と思うと、「甘美な満足感が、じわじわと分泌液のように心にひろがる」ようであり、時々「お前は自分の欲望に正直に生きることを決意した人間ではないか。自分が俗物であることを認め、俗物として暮らすことを選んだ男ではないか」と自分に言い聞かせる。良平と霧子は、お互いにすれ違っていることに気づいてはいるが、それを正面から問題とすることを何となく避けている。

霧子は、南欧調のデザインを生かした白い贅沢なマンションに、自分用の一室を借りている。そこで知り合ったばかりの、森田克巳と抱き合う。霧子が克巳を一目見て驚いたのは、カンパを求めて叫んでいた克巳の横顔に、十数年前の良平を重ねたからだ。

良平はひどく酔って霧子を抱こうとするが、霧子は身をかかわす。そんな霧子に良平は、「たとえ髪が薄くなり、

腹が突き出し、老眼鏡や入れ歯を使うようになって、中身だけはあの内灘時代の青年のままできて欲しいと考えているのさ」といい、「おれは汚れてきたんじゃないかと、視野が広くなり、物の考え方に柔軟性が増したただけだ。あの内灘時代のおれたちは、しょせんせいまい世間の中で甘ったれた感傷にひたっていたに過ぎんだ。今になつてみると——」という。

「やめてください」と霧子は硬い口調でいい、「変わったのはあなただけではないわ。私だって、あの学生時代の私じゃない。でも、私は人間が変わることを責めてるんじゃないのよ。そうじゃなくて、変わることを居なかりみたいに正当化して、過去を平然と否定してしまうようなあなたがいやなの。たしかにあの内灘時代の私たちや、学生や、仲間たちは独りよがりの青臭いヒューマニズムに陶醉してた気恥ずかしい存在だったかもしれない。でも、あそこには、あの時代や、私たちの生き方には、大事なものの、美しいものの、一片の真実のようなものがあつたと思うの。それを否定するのは、つまり私たち二人のつながりを否定するのと同じよ。そうじゃない？」という。

良平と霧子の間で問題となつている「内灘時代」は、

「内灘闘争の時代」である。占領の終結と引き替えに安保条約と日米行政協定（五二年二月二八日調印）が結ばれ、沖繩・小笠原は米軍の施政下に残され、さらに米軍の要求する場所はどこでも、軍用地として米軍に提供することが約束された。たとえば富士山麓に広大な演習場があつたが、さらに米軍は山頂にいたる部分を要求したものの、富士山に対する日本人の特別な気持ちを考慮して断念した例もあつた（五二年五月二八日）。

内灘村は日本海と河北潟に挟まれた南北に細長い砂丘地帯にあり、金沢市の北の郊外に位置する。砂丘地帯の農業の生産性は低く、また沿岸漁獲量も少なかったために、低額の補償で軍用地を設定できると政府は考えていた。五二年九月六日在日米軍の大佐が内灘を試射場として視察するや、九月二〇日には政府は内灘接收を石川県に通告した。村民による反対運動が即座に起こつたが、政府は閣議了解として四ヵ月の使用期限であるとし、補償金などの条件を出して村民を懐柔し、一二月二日接收を閣議決定した。

五三年二月下旬には事前工事を開始し、三月一八日には米軍による試射が開始された。試射は四月には終わるとの期待が村民にはあつたが、政府は永久接收する方針

であることが明らかになり、反対運動は再燃した。政府の背後には、砲弾を製造する神戸製鋼や小松製作所などの資金繰りの困難があり、また政府も米国からのMSA援助 (Mutual Security Act・米軍の軍事目的を遂行を支援するの引き換えの援助) を必要としていた事情があった。

反対運動のために五月一日からは試射が中止されたが、六月二日政府は試射場の継続使用を決定した。六月一四日には北陸鉄道労組が四八時間の米軍物資の輸送拒否を決議したが、砲弾はトラックに積みかえられて試射場に到着した。村民の権現森への座り込み、支援の労組や学生の反対集会もあったが、六月二五日試射は再開された。八月一六日には村内に外部の支援者を締め出す団体が結成され、村民以外の反対運動は低調になった。補償金の増額などにより、村民の反対も低調になり、米軍二年間その後は保安隊 (自衛隊の前身) の使用に村として同意し、反対運動は終結した。その後の五七年一月末日、日本の特別な試射を必要としなくなった米軍は、接收地を内灘村に返還した。

霧子にとっては内灘闘争は、ひとつの原点でもあるので、もう少しはば広く「内灘時代」の背景を記しておきたい。

四五年八月一四日日本はポツダム宣言の受諾を連合国に通告し、九月二日東京湾上の戦艦ミズーリ号の船上で降伏文書に調印した。米軍を中心とする連合国による占領がはじまるが、占領のための機構は米国政府が主導権を掌握する形で組織された。直接には日本政府に方針を指示するのは、GHQ (General Headquarters) のSCAP (Supreme Commander of the Allied Powers) であり、米軍を中心とするものであった。

五二年四月二八日の対日平和条約の発効で占領は終結するが、占領の方針は四七年一月三一日の「2・1ゼネスト」中止指令を画期として前後に分けられる。その背景には、ソ連を中心とした社会主義陣営と米国を中心とした資本主義陣営の対立があった。西陣営が朝鮮半島をめぐる衝突したのが朝鮮戦争で、五〇年六月二五日に三八度線全域にわたって戦闘が開始された。連合軍が占領中の日本から朝鮮に出撃するため、国内の治安維持に必要との名目で八月一〇日に警察予備隊が設置され、日本は再び軍事力を持つことになった (五二年一〇月二五日保安隊、五四年七月一日自衛隊に改組)。

「2・1ゼネスト」計画の以前には学生運動・労働運動側には、占領軍を日本人民を圧政から解放する軍隊と

の幻想があったが、中止指令以降の社会主義陣営への敵対をみて、米帝国主義の軍隊として敵視する見方が圧倒した。こうした学生・労働運動を主導した日本共産党では、五一年一〇月一六日からは占領軍や日本政府への武装闘争方針を採用した。学生・労働者のうちの先進的とみられた人々を農村・山村に潜入させ、宣伝活動を行ないつつ武装革命の日に備えさせる一方、デモなどでも火炎瓶による警察署への攻撃などが行なわれた。

対日平和条約の調印はソ連などの反対を押し切って実施されたものであり、同日に調印された日米安全保障条約（安保条約）と表裏一体をなし、日本が米国の主導する資本主義陣営の一員となることを意味した。安保条約によって占領軍は在日米軍と名前を改めただけであり、占領下で接収された軍用地の主要な部分是在日米軍基地となつて存続した。

朝鮮戦争の開始以降、米軍からの発注（朝鮮特需）によって日本経済は活況ををいするようになったが、五一年七月に朝鮮休戦会談が開催されたところから、次第に戦局は膠着し、特需が減少しはじめた。特需の減少による日本経済への打撃を回避しようとして、政府が米国に要請したのが上述のMSA援助であった。

日本経済は米国経済に従属しなければ発展は不可能のように思われ、占領の終結とは結局は日本が新たに米国の植民地に化すことにすぎないと感じられた。米国の支配と戦い、計画経済（つまりは社会主義経済）によって日本を再建することが、日本国民全体の幸福につながるよ

うに感じられたのは自然であった。

五二年五月一日には使用が不許可となつた皇居前広場を、実力でメーデー会場にしようとして、二人が射殺され一三〇人が逮捕される「メーデー事件」が、六月二四日には大阪の国鉄吹田操車場では六〇人が逮捕される「吹田事件」が、七月七日名古屋では二一人が逮捕される「大須事件」が起きた。学生運動には暴力による反体制運動もまた、当然のこととする傾向があつたのである。

五二年七月二二日関西経営者協議会は、学生運動に参加する学生には就職を保障しないと発表し、三〇日経連の代表は、求職学生について思想を明確に記載するよう

に大学に要求した。こうした背景の中で霧子は、学生運動に積極的に参加していくのであり、内灘闘争も「実力」で行なうのが当然視されていたのである。

メーデー事件などのことは、『内灘夫人』のなかでも



触れられている。

吹田事件は、霧子が大学に入学した年におこった事件である。メーデー事件、名古屋大須事件とならんで、戦後三大騒乱事件のひとつといわれていた。事件当時からすでに十六年もたっているが、いまだに裁判が続いていたのだ。すでに先月、この事件の被告に対しては騒乱罪無罪として、威力業務妨害のみの有罪判決が大阪高裁から出されていた。この判決に対して、検察側が上告せずと決定したという記事だった。

霧子は新聞をおいて、大きなため息をついた。切れたと思った時間が、再びつながり、体の中をゆくりと流れはじめる。頭の奥に不意に不揃いの合唱が聞こえた。

〈世界をつなげ 花の輪に……〉

#### 四 霧子と西条杏子と学生の生活

内灘闘争の時代の霧子と良平について霧子は、「その頃の私たち二人はそれこそ新聞紙を夜具の代りにかぶって寝て暮しているような時代だった。彼が組織から支

給される八千円足らずのお金で二人が生きていたんですもの。戦争中より、もっとひどい食べ物を食べ、それでも夜は震えながら学習し、何時間も歩いてオルグに回り、栄養失調の体でデモへも出ていたわ」と、森田克巳の同棲相手で、学生運動の中心にいる西条杏子にいう。

別の場面ではあるが、杏子は克巳に「わたしは皆と違って、自分が自活して食べて行ければいいってわけじゃないのよ。本当なら高校へ進むのだってぜいたくだったんだわ。今だって運動にあてる時間があったら、キャバレーにでも何でも勤めてお金を稼いで、家族に送りすべき立場なのよ。それをしないで運動に参加してらって事で、どれだけわたしが自分を……」と告げるような立場にいる。

五二年の民間会社の大卒の初任給は四千九百円、五三年のそれは八千九百円とする資料があるから、良平が組織から与えられたのが八千円足らずであったというのは、おそらく想定のものである。すぐ後の部分で霧子は杏子に、「一日中タオルを折って二百八十円から三百五十円くらいにしかならなかった」と当時のアルバイトのことを話すが、その方が実態に近いだろう。東京学芸大の五一年度の調査では、自宅外通学者の平均生活費は

月に四千二百円余であり、文部省調査では五二年六月のアルバイト希望率が七二・〇％・従事率が二三・〇％、五三年一月では四九・〇％と三二・〇％となっている。

五二年から五三年にかけては初任給が約二倍になっているが、賃金抑制政策が重視されなくなったため、好景気のためではない。むしろ五二年一月二十七日の衆議院で池田勇人通産相が、「中小企業の倒産・自殺もやむをえない」と発言したように、不況の最中であった。日本資本主義の復興のため、「産業合理化」、「貿易立国」などのスローガンの下で、大企業保護の政策が強引に押し進められ、大企業のみが復活へむかったともいえるような時期であった。

一方の杏子の時代は、六五年下期から七〇年下期にかけての「いざなぎ景気」の最中あたり、実質経済成長は一〇％を超過した。消費者物価上昇率は五・七％であり、経済企画庁の経済白書が「豊かさへの挑戦」と題することができた時代であった。もとより「富」は社会的に偏在するものであるが、それでも少しは学生にも「おこぼれ」があったといつてよいような時代であった。

## 五 霧子と克巳と「再出発」の思想性

杏子たちは大学の図書館を封鎖するなどの戦いを続けていたが、克巳は戦いに疑問を感じて戦列から抜けはじめた。杏子と克巳の対立が決定的になったころ、杏子は克巳の子を妊娠していることに気づくが、それを処置しないうちに、図書館の封鎖を排除しようとする大学・警察側との抗争のなかで死んでしまう。克巳は図書館に放火しようとして侵入し、未遂で発見されて一度は逃げるが、警察に自首する。

霧子も再出発を決意し、何度目かになるが内灘を見るために金沢をおとずれ、旅館でその決意を良平への手紙に記す。この部分に霧子の内灘から再出発の決意にいたる過程がまとめられている。

「私たちは東京の大学を離れて、内灘の軍事基地化反対運動に参加する途中でした。」「あの朝、睡眠不足の充血した私の目に、親不知のあたりの荒涼とした日本海のの色は、不気味なほど黒く、重く見えました。あなたは私の肩の上から首をつき出すようにして、その海を眺め、あの向こうにシベリアがある、と呟くように言った

のです」。

「全国の大学から、そして職場から、学生や若い労働者たちがその海ぞいの村へ集まってきました。演劇のグループもいたし、コーラス団もいたはずですよ。」「夜、ニセアカシアの中に、あなたと二人で坐っている時の、あの歴史に参加している人間の充実感を、私はあの日から今日まで、一日も忘れることができませんでした」。

「わけ知りの大人になることを拒否するという強い意志も論理も持たぬままに、ただ過去のあの内灘の夜々だけを思い描きながら、現実には何の方向も持たぬ中年女として、投げやりに生きてきました。でも、それももう限界がきたようです。」「私は森田克巳という若い青年と、奇妙な形で結ばれました。これがどう変わって行くかは、まだわかりません。ただ言えることは、今、私が独りで生きて行こうと決心していることだけです——」。

良平への手紙を書き終え、霧子は内灘を見に行く。内灘の海岸からの帰途にタクシーの運転手に、霧子は内灘で働ける場所はないだろうかと聞き、運転手に仕事をみつけてもらおう約束をした。途中でタクシーをとめて、霧子は内灘の遠景を見つめる。

「手前に内灘の民家の灯が流れ、さらにその向う、右

側に団地の燈火が連なっている。

黒い砂丘はその背後に、長く重く横たわって見えた。風は北から吹いていた。どこかで鋭い電線の唸りが、断続的にきこえている。

〈あの内灘はもう昔の内灘じゃない——〉

自分のこれまでの生活が、結局、変ることへの拒否にしばられて、過去の幻影の中に埋没している間に、その追憶の舞台そのものが変わってしまおうとしている。そのことに自分は今ようやく気づいたのだ、と、霧子は思った。

「霧子は顔をそらせて胸一杯つめたい夜の空気を吸い込んだ。そのとき彼女の頭の中に、砂丘一面に白く降りしきるニセアカシアの花房のイメージが、音もなく広がってきた。

〈さようなら、私の内灘。私の青春——〉

おそすぎた出発だが、出来る限り遠くまで行ってみよう、と、心の中で呟きながら、霧子は風に逆らう一本の樹のように、いつまでも夜の中に立ちつくしていた。」

霧子の新たな出発は、どのような仕事であれ、自分の力で仕事をはじめめる決意をした点にある。その出発にあたって霧子は、内灘闘争の時代を「青春」と呼び、それ

と決別する。作品としての『内灘夫人』には霧子に限定しても、霧子の友人の花森英子に誘われてのその場かぎりの遊び、霧子の睡眠薬による遊び、電話を通じてのテレホンセックス、車を乗り回して遊ぶ学生たちに強姦されそうになるなど、ふんだんに当時の風俗がちりばめられている。

そうした霧子をめぐる風俗の一方で、森田克巳や杏子の学生運動があり、霧子は風俗に身をまかせようとするものの、そこには安住できない危なっかしい存在として描かれる。したがって霧子が自分の力で生きる決意をすることは、すがすがしい印象を与えることになる。作品としては、それでよい。しかし現代史として作品をみようとすると、もう少し霧子の再出発にこだわる必要がある。

### まとめにかえて

——再出発の結果としての現在——

四五年八月一五日の日本の敗戦、というよりも一部の朝鮮人学者がよぶように「八・一五解放」という方がふさわしいが、以降、新たな国を造ろうという考えは、こ

く一般的なものであった。それだけに学生運動、労働運動に参加する人々は多かったといってもよい。逆にみればそれだけ多数の人々が、学生運動、労働運動から離れていったともいえる。離れていった人々の理由はそれぞれに異なるだろうが、「運動」に参加する自分は霧子もいっているように、「歴史に参加している」と思っているから、それから離れた自分を「歴史」に対する「脱落者」と感じざるをえなかった。

たとえば「運動」から離れて広告会社の社長になった良平を霧子は、「変わることを居なおりみたいに正当化して、過去を平然と否定してしまうようなあなたがいやなの」と非難した。霧子の再出発は、社長になる途にはつながらないかもしれないが、良平が歩んできた途の小版にすぎないであろう。杏子の死がなければ、おそらくは克巳も大学をやめて、自分の力で働く途を選んだと思われる。杏子に「運動」からの脱落だといわれながら、克巳は牛乳配達をしてえた金で、杏子に子の処置をしてくれと頼んでいるのである。

いわゆる「全共闘運動」の終焉とともに、学生運動は低調になり、「運動からの離脱」という問題自体が立ち消えになってしまった。七五年四月一二日に七年ぶりに

行なわれた東大入学式は、「全共闘運動」の終焉のひとつの画期とみなすことができる。労働運動については、七四年四月一・一二日に六百万人が参加したといわれるゼネストがひとつのピークであり、労働運動の質的転換が問題となり、社会主義運動との分離が進行し、「運動からの離脱」は問題にならなくなった。

「社会主義」を理想としそれを目指す「運動」は、現実世界の中ですでに過去のものになっているからといって、霧子たちの「運動からの離脱」の問題も、すでに過去のものであるというのは早計である。いかなる形であれ「理想」は常に存在するし、それを実現しようとする「運動」は、現実の「風俗」と衝突し、常に「運動からの離脱」は出現し続けている。ただ「理想」に共通性を欠くために、「運動からの離脱」は、個人的に「夢を折る」形になっているにすぎない。

霧子たちの「内灘」と克巳たちの「全共闘」は、時代背景も「理想」の形も「運動」の方法も違っているのに、そこからの「離脱」だけは、「理想」を過去のものとして切斷し、「風俗」を度外視して自分の力だけで生きようとする点で奇妙な一致を示す。というよりも敗戦から全共闘まで、「運動からの離脱」にはこのワンパターン

しかなかった。「離脱」者は、「理想」と絶縁し、「理想」がさも自分のものではなかったかのように整理し、現実の「風俗」の片隅に身を潜めていった。また「運動」の側も、「離脱」者をそのような状況に追い込んで満足した。

こうした観点から見れば、「内灘時代」を強烈な記憶としてとどめながら、「有閑マダム風の火遊びの程度」の「退廃への投身」にすぎない「みじめな生活」をおくる霧子の方が、「何が退廃で何が生活なのか」「手探りにもさがして」「額に汗して働く」霧子よりも、はるか「内灘時代」に忠実な霧子なのである。「みじめな生活」を続ける霧子たちが多数存在し続ければ、共通の「理想」はおぼろげながらも存在し、現代社会はもう少し変わった社会であったにちがいないのである。

#### 〔参考文献〕

- 『五木寛之作品集』全二四巻（七二年一〇月から七四年九月・文芸春秋社）
- 清水幾太郎「内灘」（世界・昭和二八年九月号）
- 遠山茂樹ら編『講座・日本歴史・現代四』（一九六三年・岩波書店）
- 藤原彰ら編『新講座・日本歴史・現代一』（一九七七

- 年・岩波書店)
- 岩崎爾郎・加藤秀俊 『昭和世相史』 (一九七一年・社会思想社)
- 正村公宏 『戦後史』 上下 (一九九〇年・ちくま文庫)
- 柴垣和夫 『昭和の歴史』 第九卷 (一九八三年・小学館)
- 『朝日ジャーナルの時代』 (一九九三年・朝日新聞社)
- 『近代日本総合年表・第三版』 (一九九一年・岩波書店)